

出会いが私にくれたもの

福島県いわき市立中央台北中学校

三年 荒井 凜子

私は小学二年生の時から数十回、長期休みに入ると北海道や沖縄で行われる保養プロジェクトに参加してきた。きっかけは二〇一一年三月十一日、東日本大震災。そして、続く福島第一原発の爆発。今までの日常が奪われ、不安と恐怖でいっぱいの生活を余儀なくされた、小学一年生、春のことだった。

「放射能はね、とつても体に悪くて浴びると病気になっちゃうの。怖いものなの。だから、外に出ては駄目よ。」

原発が爆発し、「ほうしゃのう」によって福島的美丽い自然は、思い出の場所は、空気は、汚染されてしまった。何も知らない私にそう告げた母の目には、悲しみの色が浮かんでいた。

そして、小学二年生の冬。その時の私は外で遊ぶ、ということをしつかり忘れていた。

「放射能なんてもうなくなったのに、いつまでそうしているの?」

毎日マスクをしている私に友達がかかる言葉はいつも同じで、いくら放射能の怖さを説明しても誰もわかってくれなかった。放射能はそんな簡単になくなるらないのに。見えないだけなのに。いつしか孤独を感じるようになっていた私に、母はあるものを勧め

てきた。

「ここから遠く離れた大自然の中で、何も気にせず思いきり遊んでおいで。」

それが母の願いであり、この保養プロジェクトとの出会いだったのだ。

プロジェクトを通して、私は数々の出会いを経験した。まずは、自然との出会い。見えない恐怖と戦い、自由に外に出られない息の詰まる生活から解放された私には、すべてが輝いて見えた。自由に外を駆け回り、草花に触れ、風を感じる。当たり前であるはずの「日常」の尊さを知り、喜びを感じた。そして、牧場での生活や、大自然の中の冒険、たくさん命との触れ合い、生まれて初めて雪に埋もれたあの日……。今でも鮮明に浮かび上がるそれらの経験は、私に刺激と感動を与え、大きく成長させてくれた。この経験がなかったら私は今の私になれていなかっただろう。

そして何より、一番キラキラと輝くもの。それは、たくさん友人やボランティアさんとの出会いだ。このプログラムには、福島で被災した多くの子供たちが参加している。みんな、同じ苦しみを抱えた子供たちだった。毎日共に遊び、共に笑い、共に学び、何週間もの間寝食を共にしてきた。広い福島県の中から、ばらばらに集まった私たち。けれど、同じ苦しみを乗り越え時間を共有してきた彼らは、心を許せる大好きな仲間だった。そして、そんな私たちを誰よりもそばで支えてくれたのは、笑顔がすてきなボランティアの皆さん。そのほとんどは地元で一人っ子の私は、お兄ちゃんやお姉ちゃんができたみたいで、とても嬉しかったのを覚えている。みんなというと家族のように温かくて、何でもできそうな気がして、ずっと一緒にいたくて。私に、大切に大好き

な存在ができた。

そんな中で私は、このプロジェクトで大きく得たものが二つある。一つは、本当の自分を好きになることだ。私は以前から人見知りで、震災でふさぎ込むようになってからそれが悪化してしまっていた。実際、参加した当初は知らない人しかいない環境が怖くて、猫を被ることで自分を守っていたような気がする。だが、ずっと笑顔のボランティアさんと接していくうちに、笑顔でいること、自分の言葉で本当の気持ちを語ることの大切さ、楽しさに気づけたのだ。それからは誰かと一緒にいることが楽しくなり、自分のこともなんだか好きになれたような気がした。ここでこのことに気づけていなかったら、きっと今までの困難に私は負けていただろう。だが私は今、辛いことや苦しいことにも立ち向かえている。頑張ることができている。私にとって、大きな力となっているのだ。

そして二つ目は、何よりも大切で、大好きな人たちとの出会いだ。出会いがあれば、当然別れもある。別れは、私が一番苦手なことだ。けれど、離れていても私の中にはあの日々がある。出会えたことこそが意味であり、力なのだ。辛い時でもあの日々を、みんなを思い出すだけで笑顔になれる。頑張れる。そんな最強無敵な存在が、私にはある。それがとても幸せだ。

中学二年生の春以降、勉強や部活がより忙しくなり、プロジェクトに参加できなくなってしまっている。けれどあの経験が、すべての出会いが、今の私の背中を押ししてくれている。あの保養プロジェクトこそが、私に力をくれたものであり今も力となっているものなのだ。これから先、数々の困難が待っていることだろう。だけど、私は負けない。この胸にある力と一緒に、打ち勝っていけるから。